

## クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2019 池澤 優

## ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



2019年度東京大学朝日講座

第4回 10月23日

未来を拓く「死者」の記憶  
—生死のつながりの視点から—

東京大学文学部  
死生学・応用倫理センター  
池澤 優

# 概要

- ◆ われわれの生は既に世を去った死者とつながることで意味を獲得することを、死生学という領域の議論を参照することで論じる。なお、ここでの死者は宗教的な死後の霊魂ではない。

# 目次

1. 死生学とは何かーサナトロジーの成立
2. 死と悲嘆のプロセスの理論
3. 阪神淡路大震災の調査記録から
4. ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』から考える
5. 結論ーなぜ我々は死者とつながろうとするのか

# 死生学とは何か

- ◆死生学(Death and Life Studies)、死学(Death Studies)、生死学(Life and Death Studies)、サナトロジー(Thanatology)
- ◆1959年、心理学者ヘルマン・フェイフェル、論文集『死の意味するもの』。
- ◆1958年、心理学者エドウィン・シュナイドマン、自殺予防運動を開始(自殺学suicidology)。
- ◆1960～70年代にサナトロジーの重要な著作が刊行。

# サナトロジーの成立

- 1958年 Edwin Shneidman、ロサンゼルス自殺予防センターを開設。
- 1959年 Herman Feifel ed., *The Meaning of Death*.
- 1960年 国際自殺予防学会創設。
- 1962年 Ernest Becker, *The Birth and Death of Meaning: a Perspective in Psychiatry and Anthropology*.
- 1962年 Viktor Frankl, *Man's Search for Meaning*.  
(『夜と霧』1946の英訳)
- 1963年 Jessica Mitford, *The American Way of Death*.
- 1965年 Barney Glaser & Anselm Strauss, *Awareness of Dying*.

# サナトロジーの成立

- 1965年 Robert Fulton、ミネソタ大学で死の準備教育
- 1967年 Robert Lifton, *Death in Life : the Survivors of Hiroshima*.
- 1967年 Shneidman、*Bulletin of Suicidology*誌を創刊
- 1967年 Elisabeth Kubler-Ross, *On Death and Dying*.
- 1969年 John Bowlby, *Attachment and Loss*.
- 1970年 Robert Kastenbaum、*Omega : Journal of Death and Dying*誌を創刊
- 1972年 Avery Weisman, *On Dying and Denying: a Psychiatric Study of Terminality*.

# サナトロジーの成立

## ◆サナトロジーは

- 中心は心理学、社会心理学的研究。
- 主要なテーマは死の恐怖/不安。現代人には無意識的、意識的に死への恐怖/不安があり、死から目をそむけているという主張が強い。
- 方法論的には実証主義。実験や統計で死の恐怖/不安があることを証明する方向に向かう。
- 純粹に学問であるだけでなく、「死の認知運動」(death awareness movement)の一部。



# サナトロジーの成立

## ◆死の認知運動とは？

- フィリップ・アリエス（成瀬駒男訳『死を前にした人間』、みすず書房、1990）  
飼いならされた死（中世前期）、己の死（中世後期）、遠くて近い死（ルネサンス）、汝の死（近代）、  
「倒立した死」（現代）
- ジェフリー・ゴラー（宇都宮輝夫訳、『死と悲しみの社会学』、ヨルダン社、1986）  
「死のポルノグラフィー」

# サナトロジーの成立

## ◆死の認知運動とは？

- 19世紀後半から20世紀前半にかけての死の様態：伝統的な宗教的死生観と儀礼の後退、個人化、公的領域における死の表象の消滅。
- 現代が死から目をそむけていることを批判、死を直視し、恐怖と悲しみを乗り越えて前向きに生きることを主張する社会運動。
- 初期のサナトロジーの問題関心：死の恐怖/不安の存在、それを乗り越える方法。

# サナトロジーの成立

- ◆ 死の認知運動は、潜在的な死の恐怖/不安が人間の思考や行為を方向付けているに違いないとの枠組みの中で、死の恐怖/不安を精緻に測定する方向へ研究が展開していった。(Wass, Hannelore & Neimeyer, *Dying: Facing the Facts*, Taylor & Francis, 1995.)
- ◆ 死の準備教育 (death education)
- ◆ 死別の悲嘆: 死を受容し死者から別れ、前向きに生きる。死者の思い出を抱き続けるのは病的。

# サナトロジーの成立

- ◆ 死のプロセス (dying) でも死の受容があるべき死に方とされる。
- ◆ Elisabeth Kübler-Ross, *On Death and Dying*, 1969. (鈴木晶訳『死ぬ瞬間—死とその過程について』、中公文庫、2001。):  
否認→怒り→取り引き→抑鬱→受容
- ◆ Wass, Hannelore & Neimeyer, *Dying: Facing the Facts*, 1995. キューブラー=ロスの研究について、次のように要約。

# サナトロジーの成立

- ①5段階の区分が存在する明瞭な証拠はない。
- ②仮に5段階が存在したとしても、その通りに直線的に進行する証拠はない。
- ③患者のインタビューに対するキューブラー=ロスの解釈が信頼できる証拠はない。
- ④死の過程の理論通りに患者が進むのが望ましいという強制が働きかねない。
- ⑤個人性を無視。終末期患者との交流を妨害する障碍になる。

# 死と悲嘆のプロセスの理論

- ◆ Robert Neimeyer ed., *Meaning Reconstruction and Experience of Loss*, 2001. (富田拓郎ほか監訳『喪失と悲嘆の心理療法—構成主義からみた意味の探究』、金剛出版、2007。)
- 二重過程モデル(DPM): 死者の記憶を保ち続けることで意味の再構成を行う。
- 構成主義: アイデンティティは他者との関係の中で形成される。重要な他者との死別はアイデンティティを破綻させる。

# 死と悲嘆のプロセスの理論

- ◆クライアントに世界像/自己像を語らせることで、死別の変化に応じたナラティブ(物語り)を自ら作り上げるのを援助。
- ◆その過程で、死別した重要な他者の記憶は新たな意味づけの中核(象徴的きずな)となる。
- ◆悲嘆＝喪失と回復の間の「揺らぎ」。人間を成長させるというポジティブな機能がある。
- ◆スピリチュアリティ
- ◆“悲しみの中で行き詰まってしまった”状態(ネガティブ・スパイラル)は、介入が必要。

# 死と悲嘆のプロセスの理論

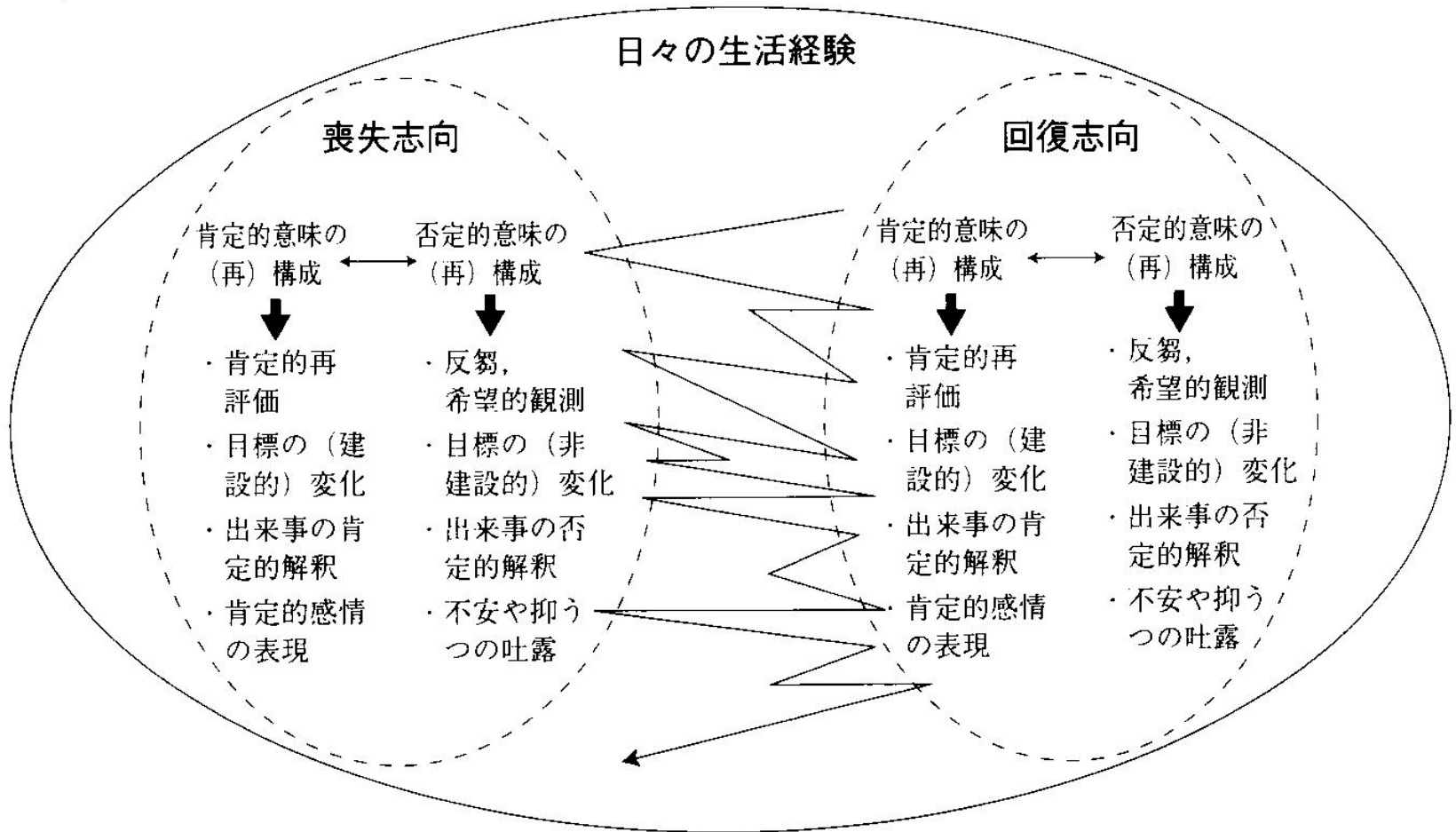


図3-2 死別へのコーピングの二重過程モデル：経路

ニーマイアー前掲書、81頁



# 阪神淡路大震災の調査記録から

- ◆樽川典子編『喪失と生存の社会学—大震災のライフ・ヒストリー』、有信堂高文社、2007。
- ◆「現代日本人の死者像」などという定型モデルは存在しない。
- ◆しかし、多くの事例に繰り返し表れる要素やパターンのようなものが存在する事も確か。

# 阪神淡路大震災の調査記録から

- ① 47歳(震災当時)男性:妻を失う。最初は遺された娘を育てるのに一生懸命、そのうちになぜ妻だけがという怒りの感情になり、それが自分は家庭を顧みず、自分勝手な生き方をしてきたという自責の念に変化する。そのような時、仕事(土木関係)がない折りに、ホームヘルパーの講習会に誘われ、そんなに関心を持っていなかったが、行ってみた(彼の妻は生前、ボランティアや市民活動に熱心だった。彼はこれを「家内が僕の背中を無言で押していたんだらう」と表現している)。講習を受け、閉ざされていた気持ちが少しずつ開いていくのを感じ、妻のやり残したことを継承することで、今までの自分の罪を許してくれるのではないかと思い、老人ホームでボランティアとして働くようになる。彼は今の自分は妻が導いてくれている、死後、再会するだろうという実感を持っている。(樽川前掲書182-93頁)

# 阪神淡路大震災の調査記録から

⑥32歳男性：妻と5歳の娘を失い、11ヶ月の長男と彼は生き残った。彼は妻に後悔の念を抱いている。娘が産まれた後、夫婦仲が悪くなり別居した。自分の稼ぎが悪く、妊娠中にもかかわらず妻はパートをして二度、流産した(と思っている)。長男が生まれ、ようやく夫婦らしくなったところだった。なぜ妻ではなく、自分が死ななかつたのかと真剣に思った。また娘が5年だけが一生懸命生きたのに対し、この10年何をやってきたのか、恥ずかしい思いがある。息子がいなければ自殺していたかもしれない。今は「子どもにバトンタッチするまで」生きていたい。

彼は宗教は信じていないが、天国はある、妻と娘が神様みたいな存在になっていると言う。仏壇や墓で彼女らと会って会話していると感じている。妻への後悔の念は重荷だが、思い出を乗り越えろと言われるのは抵抗がある。自然につきあっていくしかない。(樽川前掲書221-231頁)

# 阪神淡路大震災の調査記録から

◎34歳女性:夫を失い、長男、長女と共に生き残った。震災後、夫の実家に厄介になったが、そこで同じ人を亡くしても、立場で悲しみは違うのだと感じる。例えば、彼女は子どものために懸命に元気を出して生きようとしているが、夫の妹から見ると、なぜ兄が死んだのに元気にしているのかということになる。彼女は夫を亡くして、すごく強くなったと感じている。一方で生きていれば夫がやったはずのことを自分がやらなければならない、「すこしむかつくところがある」。夫は見守ってくれているかもしれないが、それが何だと思っている。夫の写真に話しかけることは、一切、ない。(樽川前掲書232-241頁)

# 阪神淡路大震災の調査記録から

- ④31歳女性：夫を失い、本人も重症を負う。入院中、生き残った長男は夫の両親があずかってくれたが、舅姑の世話にはならなかった（後に和解し、現在は仲がよい）。夫を亡くした悲しみと子を亡くした悲しみは違う。今は夫のこと、自分が一番幸せだった時のことをよく考える。夫のへの思いが子を育てていくときの糧になった（夫への責任）。子との生活の中で夫のことは常に話題になり、「透明な人間のような感じで、生活のサイクルの中に入って」いる。かつてはなぜ死んでしまったのかと恨む気持ちがあったが、今は夫への気持ちは前よりも強くなったと感じている。（樽川前掲書252-9頁）

# 阪神淡路大震災の調査記録から

- ⑨10歳男性:震災の二日後、父が死亡した(過労死?)。高校の時まで父の死は重荷で、レインボーハウス(あしなが育英会が震災遺児のケアのために設けた施設)の死別体験を語る催しは苦痛でたまらなかった。高校一年の時の催しで自分の体験を話したのがきっかけで、父の死のお蔭で自分は他の人には経験できない経験をしている、「めっちゃめっちゃラッキーや」という考えに変わる。それに伴い、父の思い出の意味も変わった。かつては「なんで勝手に死ぬんや」と思っていたが、今は「そういうこと思っていたの、ごめんな」と思っている。兄弟の間で父の思い出(例えば、電車に乗る時に、笛を吹いた駅員に対し、お年寄りがびっくりすると抗議した話)で、「すげー偉大や」と話している。(樽川前掲書310-8頁)

# 阪神淡路大震災の調査記録から

- ◆死者は何らかリアルな存在、つながりを実感できる存在として経験されている。死者の記憶（過去の思い出）が生き方を変え、或いは現在の生きがいを形成する。
- ◆それらが「死後の霊魂」であるかどうかは、恐らく殆ど意味がない。むしろ、宗教において霊魂という語で表現されてきたものも、遡れば、そのような死者とのつながりの感覚なのではないか。

# ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』 から考える

◆ Robert J. Lifton, *Death in Life: the Survivors of Hiroshima*, 1968. (梶井迪夫・湯浅信之・越智道雄・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く—精神史的考察』、岩波書店、2009。)

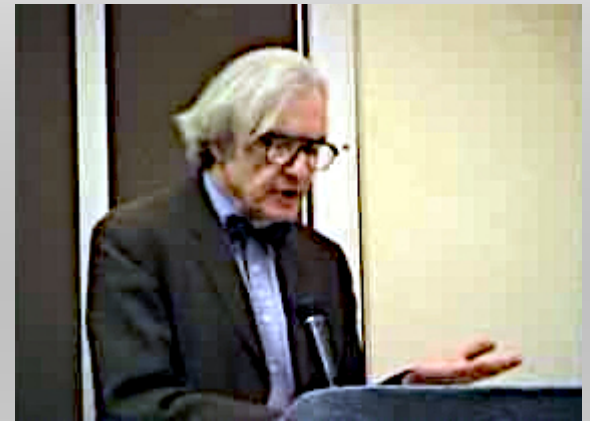


Photo by Mark Buker, from Wikipedia Commons  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:2000\\_03\\_17\\_Robert\\_Jay\\_Lifton.jpg?uselang=en#/media/File:2000\\_03\\_17\\_Robert\\_Jay\\_Lifton.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:2000_03_17_Robert_Jay_Lifton.jpg?uselang=en#/media/File:2000_03_17_Robert_Jay_Lifton.jpg)  
CC BY-SA 3.0



# ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』

- ◆ Robert Jay Lifton: 1926～。ニューヨーク医科大学を卒業後、精神科医として勤務する一方、コーネル大学で生物学専攻、医学博士号取得。1951年からアメリカ空軍に医師として勤務、来日する。その後、ハーバード大学、イエール大学などに勤務。著書衆多だが、ナチの強制収容所、ベトナム戦争、スリーマイル島の原発事故など、戦争や災禍を生き延びたsurvivorsの研究を中心とする。本書は広島市の被爆者73名を対象に行ったインタビュー調査に基づき、いわゆるsurvivors' guilt(災害等の生存者が犠牲者に対し、たとえその死に責任がなくとも、罪の感情を持つこと)に関する古典的な名著。

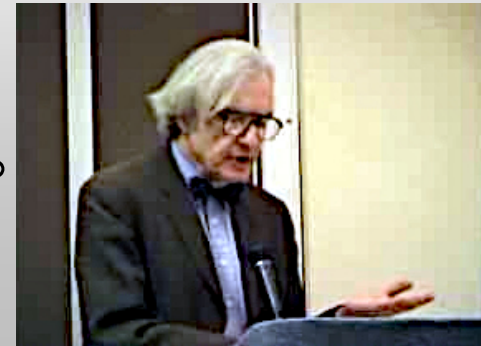


Photo by Mark Buker, from Wikipedia Commons  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:2000\\_03\\_17\\_Robert\\_Jay\\_Lifton.jpg?uselang=en#/media/File:2000\\_03\\_17\\_Robert\\_Jay\\_Lifton.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:2000_03_17_Robert_Jay_Lifton.jpg?uselang=en#/media/File:2000_03_17_Robert_Jay_Lifton.jpg)  
CC BY-SA 3.0

# ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』

◆リフトンの理論を基に死者とのつながりのメカニズムを考える。

◆生/死の“原型的イメージ”

- ①人間関係（結合/別離） 生も死も関係性の中で体験される
- ②生の目的（統合/分断） アイデンティティ
- ③成長、生命力（活動/静止） 生き生きとしていること

# ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』

- ◆生の意義づけ(不死性の象徴化、象徴的不死)
  - ①生物的(子孫による継承)
  - ②神学的(魂の不死)、
  - ③創造的(偉大な業績を残す)、
  - ④自然的(大いなる自然に回帰するという感覚)
  - ⑤経験的(何事かに集中することで、生/死を相対化する)

# ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』

- ◆どの類型が突出するかは文化や時代により異なる。例えば、日本では①④が突出する。(以上、加藤周一・ライシュ・リフトン、矢島翠訳、『日本人の死生観』、岩波書店、1977。)
- ◆生の意義→価値観、世界観→道徳的秩序→自己形成formation(リフトン、渡辺牧ほか訳『現代、死にふれて生きる』、有信堂、1989。)

# ロバート・リフトン『ヒロシマを生き抜く』

- ◆“心理的締め出し”(“精神的麻痺”)
- ◆“罪の意識”(“死者との一体化”)
- ◆“精神的麻痺”と“罪の意識”は人類に普遍的なメカニズム。
- ◆罪の意識←人間相互のつながりの感情(同情、連帯)
- ◆精神的麻痺←死の不安に対する自己防衛
- ◆現代では、精神的麻痺は全ての生命現象に浸潤しつつある。

# 結論—なぜ我々は死者とつながろうとするのか

- ◆ 価値観(象徴的不死)は親しい他者との交流の中で獲得される。自分の生の意義も他者なくしては成立しない。
- ◆ 死者の記憶＝現在の視点から措定された「物語」(ナラティブ)、現在に関する認識と未来への理想を含む。その理想を実現することで、犠牲者の死は意味のある犠牲であることになる。死者の記憶は未来に向かって行動を起動する力がある。

# 結論—なぜ我々は死者とつながろうとするのか

- ◆他者の死を無意味でないとすることは、自己の死を無意味にしないこと。死者が自分にとって意味がないなら、自分も未来にとって意味がないことを認めることになる。
- ◆死者(過去)とのつながり、物語りとしての現在の生、未来に対する意義は同じ事柄の三つの局面。過去と現在は共に、人類がいかなる未来を持つのかという課題にかかわる。

# グループワークテーマ

- 今日は、死者の記憶には我々に行動を起こさせ、未来を開く力があることを話したが、時間の制約から死者の記憶のプラス面しか話せなかった。果たして死者の記憶には、欠点や弱点はないのだろうか。総合的に考えて、死者の記憶や死者とのつながり感覚が持つ長所と欠点、強みと弱点を考えてみてください。